

「歴史の終わり」から「歴史の回帰」へ——国際秩序観の転換と歴史教育——

春名展生（東京外国語大学大学院国際日本学研究院）

1. はじめに

1) 国際秩序観の転換

21世紀が始まるころに、そのようなリベラルな国際秩序は限界に直面し、危機に包まれることになった。世界史が逆回転していく。歴史は必ずしも、よりよい世界、より平和な世界へ向かって単線的に発展するわけではない。進歩主義的な歴史観に基づくリベラリズムの国際秩序観が後退し始めたのである。すなわち、「法の支配」は「ジャングルの掟」によって取って代われ、パワーポリティクスが再び興隆し、地政学が復活していく。

（細谷雄一「リベラルな国際秩序と日本外交」『国際問題』690号、2020年）

2) 歴史教育の転換

「歴史総合」は、地理歴史科の中に設けられた標準単位数2単位の必修科目である。近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する科目として、今回の改訂において新たに設置された。

（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』）

【問】 2つの転換：時期の符合は単なる偶然か？

2. リベラルな国際秩序の揺らぎ？

1) 「リベラルな国際秩序」と「歴史の終わり」

What we may be witnessing is not just the end of the Cold War, or the passing of a particular period of postwar history, but the end of history as such: that is, the end point of mankind's ideological evolution and the universalization of Western liberal democracy as the final form of human government.

（Francis Fukuyama, “The End of History?” *The National Interest*, Summer 1989）

Now, we can see a new world coming into view. A world in which there is the very real prospect of a new world order... A world in which freedom and respect for human rights find a home among all nations.

（President George H. W. Bush, 6 Mar. 1991）

What do states that have just won major wars do with their newly acquired power? My answer is that states in this situation have sought to hold onto that power and make it last, and that this has led these states, paradoxically, to find ways to set limits on their power and make it acceptable to other states.

(G. John Ikenberry, *After Victory*, 2001)

2) 国際秩序の「揺らぎ」?

【古城佳子】最近、世界各国の外交を論じる雑誌では「国際秩序が揺らいでいる」との特集が組まれています。果たして、「秩序の揺らぎ」は実際に生じているのか。

【宮城大蔵】リベラル・インターナショナル・オーダーというものが西側諸国の間で存在していたのは間違いありませんが、これが世界中を包むかたちで 70 年間存在していたのかというと、そこは多分違うのだろうなと思っています。

【古城佳子】米国のアイケンベリー氏の論文で書かれている「リベラル・インターナショナル・オーダー」という見方自体が実は極めてアメリカ的であり、秩序の基盤と思っていたものが、実はなくなってしまったのではないかと米国自身が驚愕しているが、異なる地域から見ると、違う見方ができるということでしょうか。

【中山俊宏】日本は、米国の言説空間に取り込まれてしまっている部分があるから、一緒になって驚愕しているという側面もあると思います。

(遠藤乾ほか「座談会 国際秩序は揺らいでいるのか」『国際問題』668号、2018年)

3) 日本（政府）の選択

我が国の国益とは、まず、我が国自身の主権・独立を維持し、領域を保全し、我が国国民の生命・身体・財産の安全を確保することであり、豊かな文化と伝統を継承しつつ、自由と民主主義を基調とする我が国の平和と安全を維持し、その存立を全うすることである。〔中略〕

さらに、自由、民主主義、基本的人権の尊重、法の支配といった普遍的価値やルールに基づく国際秩序を維持・擁護することも、同様に我が国にとっての国益である。

(「国家安全保障戦略」、2013年12月17日〔閣議決定〕)

リベラルな国際秩序はいま、大きな危機と混迷のなかにある。そして、「自国中心主義」が強まるアメリカやイギリス、そして権威主義体制下のロシアや中国とは異なり、日本は「ルールに基づいた国際秩序」やリベラルな国際秩序を擁護するための外交を展開してきた。

(細谷雄一「リベラルな国際秩序と日本外交」『国際問題』690号、2020年)

3. 「日本史」から「歴史総合」へ

1) 日本政府（文部科学省）の意図

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界と其中的の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 近現代の歴史の変化に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。

(文部科学省「高等学校 学習指導要領（平成 30 年告示）」)

2) アジア・太平洋戦争への過程の歴史像

第 10 章 二つの世界大戦とアジア

4 恐慌の時代：戦後恐慌から金融恐慌へ、社会主義運動の高まりと積極外交への転換、金解禁と世界恐慌、協調外交の挫折

5 軍部の台頭：満州事変、政党内閣の崩壊と国際連盟からの脱退、恐慌からの脱出、転向の時代、二・二六事件

6 第二次世界大戦：三国防共協定、日中戦争、戦時統制と生活、戦時下の文化、第二次世界大戦の勃発、新体制と三国同盟、太平洋戦争の始まり、戦局の展開、国民生活の崩壊、敗戦

(『詳説日本史 改訂版』山川出版社、2020 年)

第 6 章 経済危機と第二次世界大戦

1 世界恐慌の発生と各国の対応：世界恐慌の発生、金本位制からの離脱と世界経済のブロック化、アメリカのニューディール、ソ連の社会主義

2 ファシズムの台頭：ファシズム体制の広がり、ドイツのナチズム、1930 年代のヨーロッパ、ドイツの拡張政策

3 日本の恐慌と満洲事変：政党内閣と金融恐慌、協調外交と世界恐慌、満洲事変と政党内閣の終焉、恐慌からの回復

4 日中戦争と国内外の動き：天皇機関説事件と二・二六事件、日中戦争の勃発、新体制運動と三国同盟

5 第二次世界大戦と太平洋戦争：開戦とドイツの攻勢、独ソ戦、日米交渉と太平洋戦争、ファシズム諸国の敗北、日本の敗北、第二次世界大戦の結果

(『歴史総合 近代から現代へ』山川出版社、2022 年)

3) もうひとつの目的

(3) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

(文部科学省「高等学校 学習指導要領 (平成 30 年告示)」)

4. 「多面的・多角的な考察」か、通説の打破か？

1) 「歴史総合」的思考？

本院は、戦後五十年にあたり、全世界の戦没者および戦争等による犠牲者に対し、追悼の誠を捧げる。また、世界の近代史における数々の植民地支配や侵略行為に想いをいたし、我が国が過去に行ったこうした行為や他国民とくにアジア諸国民に与えた苦痛を認識し、深い反省の念を表明する。我々は、過去の戦争についての歴史観の相違を超え、歴史の教訓を謙虚に学び、平和な国際社会を築いていかなければならない。

(衆議院「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」、1995 年)

百年以上前の世界には、西洋諸国を中心とした国々の広大な植民地が、広がっていました。圧倒的な技術優位を背景に、植民地支配の波は、十九世紀、アジアにも押し寄せました。その危機感が、日本にとって、近代化の原動力となったことは、間違いありません。アジアで最初に立憲政治を打ち立て、独立を守り抜きました。日露戦争は、植民地支配のもとにあった、多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました。

(安倍談話、2015 年)

慰安婦制度がなかったとは言わないし、軍が管理していたのは間違いない。だがそれは当時の世界の状況として軍がそういう制度を持っていたのも厳然たる事実。近現代史を勉強して慰安婦ということを知ると、とんでもない悪いことをしていたと思うかもしれないが、当時の歴史をちょっと調べれば日本軍だけでなくいろんな軍で慰安婦制度を活用していた。

(橋下徹 [大阪市長]、日本経済新聞、2013 年 5 月 17 日)

[比較] 「日本史」的思考？

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

(村山談話、1995 年)

2) 狭量な「リベラル国際秩序」擁護者

「ロシア」という国を悪者にするのは簡単である。けれどもその国の正義がウクライナの正義とぶつかり合っているのだとしたら、それを止めるにはどうすればいいのか。なぜこのようなことが起こってしまっているのか。一方的な側からの意見に左右されてものの本質を見誤ってはいないだろうか？誤解を恐れずに言うと「悪」を存在させることで、私は安心していないだろうか？人間は弱い生き物です。だからこそ、つながりあって、とある国家に属してその中で生かされているともいえます。そうして自分たちの国がどこかの国を侵攻する可能性があるということを自覚しておく必要があるのです。そうすることで、自らの中に自制心を持って、それを拒否することを選択したいと想います。

(河瀬直美、東京大学学部入学式、2022年4月12日)

ロシア軍が殺戮している多くは妊婦や子供など罪のない一般市民。他方でウクライナ軍は、自国の国土を蹂躪して、市民を殺戮するロシアの侵略軍を撃退している。この違いを見分けられない人は、人間としての重要な感性の何か欠けているか、ウクライナ戦争について無知か、そのどちらかでは。

(細谷雄一、Twitter、2022年4月13日)

侵略戦争を悪と言えない大学なんて必要ないでしょう。

(池内恵、Twitter、2022年4月13日)

3) 「新しい歴史」像と安全保障政策の転換

戦後日本の平和教育は、日本が起こした無謀な「侵略戦争」への深い反省に立ち、平和憲法の意義を確認するというすじみちで進められてきた。〔中略〕このような平和教育は一つの定型として現場に定着し、父母・国民からおおむね支持されてきたことは疑いない。

状況が根本的に変化したのは湾岸戦争以後である。湾岸戦争は、平和教育がよりどころとしてきた憲法九条の「平和主義」の理想が国際政治の現実の中で破綻したことを示す衝撃的な事件であった。

(藤岡信勝『汚辱の近現代史』徳間書店、2001年)